ウィズコロナ時代において、アーティストたちはさまざまな芸術活動に挑戦しています。みなさまからの寄付で行われているその活動の一部をご紹介します。

アーツサポート関西（ASK）が支援した活動のご紹介

企画協力▶美術

クロスホテル大阪とのコラボレーションで２つの現代美術展が開催されました

ASKの企画協力による展覧会「Nice to Meet Art 2022」が、2022年７～８月、大阪ミナミのクロスホテル大阪で２期に分けて開催されました。

第１期の『the Cityscape』（７月14日～８月３日）は、アーティストの森村誠さんの個展。DMなどに印刷された小さな地図を切り抜き、大量に集め、糸を使って布の上に縫い合わせていくマップの「刺繍」作品です。針と糸で編まれる都市の広がりが、見る人の脳内に広がる都市のイメージとつながります。

第２期の『庭の音／garden notes』（８月７日～21日）は、アーティストの小出麻代さんと山本理恵子さんの二人展。小出さんは、作品への視点を移動させたり光を反射させたりして鑑賞者の意識をずらし、山本さんは抽象と具象を自由自在に行き来する絵画を展示しました。また、二人の共同作品《LETTERS》は、手紙を交わすように二人が布の端切れをやりとりし、少しずつ縫い足しながら作っていった布の作品です。10回以上におよぶ「対話」で生まれた作品には、独特な造形感覚がただよう不思議な魅力が感じられました。

『庭の音／garden notes』会場風景
小出麻代・山本理恵子
場所：クロスホテル大阪

クラウドファンディング助成▶美術

３名の現代美術家による『Positionalities』展が京都で開催されました

現代美術アーティストの金光男さん、山田周平さん、東恩納裕一さんの企画・参加による展覧会『Positionalities』が、2022年７月30日～８月28日、京都市立芸術大学が運営するGallery＠KCUA（ギャラリーアクア／京都市中京区）で開催されました。

Positionalities（ポジショナリティーズ）という言葉は、英語で「さまざまな立場」を意味します。作家は自身の活動や作品を通して世界と関わる際、それぞれが異なる「立場」をとります。社会を見る視点の違い、扱うテーマの表現の違い、絵画か映像かといった作品の様態の違いなど、その立場はさまざまです。本展は、ほぼ同じように見える巨大な絵画作品をあえてシンプルに連続して壁に掛けて展示するなど、なるべくありのままの状態で作品を見せることで、鑑賞者に自らの「立場」を展示から感じ取ってほしい、そんなメッセージが込められているように感じました。

この展覧会には企画の内容を統括するキュレーターとして、今、日本の現代美術界で注目を集める気鋭の美術評論家・山本浩貴氏が関わったことでも話題となりました。本展は、クラウドファンディング型の助成となり、ASKのホームページ上で75万円の寄付を集めて実施されました。

『Positionalities』会場風景　金光男・山田周平・東恩納裕一
場所：Gallery@KCUA　撮影：来田猛　写真提供：京都市立芸術大学

一般公募助成▶舞台芸術

演劇ユニットiakuによる『あつい胸さわぎ』が東京と大阪で上演されました

大阪出身の劇作家・横山拓也さんが主宰する演劇ユニットiaku（イアク）の公演『あつい胸さわぎ』が、2022年８月４日～14日に東京のザ・スズナリ、８月18日～22日に大阪のインディペンデントシアター2ndで開催されました。

『あつい胸さわぎ』公演より　iaku
場所：ザ・スズナリ　撮影：井手勇貴

横山さんは、現代の社会問題を正面から取り扱う劇作で注目を集める存在。『あつい胸さわぎ』は、若い女性がかかる若年性乳がんをテーマにした作品で、2019年に初演され好評を博し、今回、会場の規模を拡大して東京と大阪で再演となりました。

小説家を夢見て大学の文学部に通う主人公の娘と、ひとり親で彼女を育てあげた明るく元気な母。２人は時にはささいなことで言い争い、時にはお互いを優しく思いやる大阪のどこにでもいる母と娘。しかし突然、娘に乳がんの診断が下り、２人の周囲の世界は一変します。緻密に練り上げられた会話のリアリティや複雑に交錯する人と人との関係性が、物語の進行に厚みを加えていきます。

この作品は各方面から高く評価されて話題となり、女優の常盤貴子さんが母役を演じる形で映画化が決定。2023年１月に全国で公開されました。

未来アート寄金助成▶コンテンポラリーダンス

コンテンポラリーダンサー・高野裕子さんによるダンス公演『home』

関西を拠点に活動するコンテンポラリーダンサー・高野裕子さんが、2022年８月27、28の両日、大阪府池田市のカフェ・GULI GULIで『home』を上演しました。

高野さんは神戸女学院大学で舞踊を学んだ後、2010年にドイツに渡りダンサーとして活躍。帰国後は、地元の兵庫県西宮市を拠点に、さまざまなユニットにかかわりながらダンサーとして活動する一方、大阪府や西宮市の小学校と共同で子どもたちにダンスの学びに触れてもらう取り組みにも積極的にたずさわっています。

公演は、外気にまだ太陽の熱気が感じられる８月の夕方６時にスタート。ガラス窓越しに見える夕暮れ間近の日の光にあわせるかのように、４名のダンサーが、ときには空気に触れ、外部の音をとりこみながら、「耳をすます」「たたずむ」「待つ」といった単純な動作を繰り返します。やがて身体の動きは静かに収束していき、最後に、わずかに灯るダウンライトに照らされた１人のダンサーが吐露する「ただいま」のひとことで、観客はhomeの夢想からふっと目を覚します。

『home』公演より
場所：GULI GULI　撮影：高橋拓人

あえて小さな空間で、観客と親密な空間を分かち合うことで生まれる表現の意味。そんな芸術の１つのあり方をしっかりと感じさせてくれる公演でした。

クラウドファンディング助成▶伝統芸能

能楽師 山本章弘さんと指揮者 ケント・ナガノさんによる共演『The Spirit of the Moon』

世界的な指揮者ケント・ナガノさんと、観世流能楽師・山本章弘さんが「月」をテーマに能舞台で共演する『The Spirit of the Moon』。2022年９月12日、この奇跡ともいうべきコラボレーションが山本能楽堂（大阪市中央区）で実現しました。

オペラや現代音楽の指揮で極めて高い評価を得る日系アメリカ人３世のナガノさんは、長年、日本の幽玄なる美・能楽とのコラボレーションを構想しており、この度、海外でも能楽公演を行う山本さんに声をかけ実現しました。

『The Spirit of the Moon』公演より　場所：山本能楽堂　撮影：面高真琴

この日のために１年以上にわたり準備を進めてきた舞台では、ナガノさんが芸術監督をつとめるハンブルク・フィルハーモニー管弦楽団メンバーによる室内楽と、世界的なメゾソプラノ歌手として知られる藤村実穂子さんが、ナガノさんの指揮でシェーンベルグの奇想の名曲『月に憑かれたピエロ』を演奏。それに対し山本さんは、今昔物語に出てくる、自らの身を食料として差し出すために火に飛び込んで自らを犠牲にしたうさぎの物語を新作能として創作し、演じました。

和と洋が幻想的な月のイメージのもとで出会い、能舞台の上で響きあった一夜限りのパフォーマンスは、まさに静かな秋の月夜に起こった「衝撃」。その場にいた観客はもちろん、オンライン配信で観劇した多くの人々を魅了しました。

一般公募助成▶舞台芸術

8.22企画による『さくらんぼ畑』がTheater E9 Kyotoで上演されました

俳優・杉江美生さんが主宰する8.22企画によるチェーホフ原作『さくらんぼ畑』が、2022年10月28日～30日、Theater E9 Kyoto（京都市南区）で上演されました。『さくらんぼ畑』は、チェーホフの有名な戯曲『桜の園』の新訳として上演されたもので、定番の戯曲に新しい光を当てる試みとしても注目されました。杉江さんは、ニューヨークで演劇メソッド（チェーホフ・テクニック）を学び、俳優が演技する技量の重要性を感じていたということで、今回はオーディションで選ばれた幅広いバックグラウンドをもつ俳優が役を担い、チェーホフ・テクニックを取り入れた稽古を行って公演にのぞみました。

物語の舞台は革命前夜のロシア。社会が多くの矛盾を抱えて大きく動こうとする中、過去の栄光にすがり、社会の荒波にもまれて没落していく貴族の姿が描かれます。

舞台のセットは、色彩をおさえたシンプルなものでありながら、力強い美しさが漂い、重苦しい歴史の存在が浮かび上がります。俳優の演技は、発声および身体の使い方ともに、明瞭で強い表現性があり、そこに演劇メソッドの成果が見て取れるように思いました。俳優によって「生」で演じられる演劇の魅力と醍醐味が存分に伝わってくる舞台となりました。

『さくらんぼ畑』公演より
場所：Theater E9 Kyoto　撮影：村上信六